

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 所長

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 2 号について
平成 2 3 年度病害虫発生予報第 2 号を発表したので送付します。

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 2 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載 ページ
早期水稲	1 葉いもち 2 斑点米カメムシ類	並	2 2
普通期水稲	1 葉いもち 2 スクミリンゴガイ		2 2
野菜・工芸作物全般	1 アブラムシ類 2 ハスモンヨトウ	やや多 並	3 3
施設野菜	1 土壌病害虫 2 コナジラミ類・アザミウマ類・アブラムシ類		3 3
いちご (親株)	1 うどんこ病 2 ハダニ 3 アブラムシ	前年と同程度 前年より多い 前年より多い	4 4 4
果樹全般	1 果樹カメムシ類	やや多	4
カンキツ (露地栽培)	1 そうか病 2 かいよう病 3 黒点病 4 ミカンハダニ 5 ミカンハモグリガ 6 アブラムシ類	並 並 並 やや多 並	5 5 5 5 5 6
茶	1 炭疽病 2 カンザワハダニ 3 チャノコカクモンハマキ 4 チャハマキ 5 チャノホソガ 6 チャノミドリヒメヨコバイ 7 チャノキイロアザミウマ 8 クワシロカイガラムシ	やや少 やや多 並 やや多 並 並 並 やや少	6 6 6 7 7 8 8 8

は防除情報を発表

作物の生育状況(5月中旬)

早期水稲は分けつ期、うんしゅうみかんは落弁期～果実肥大期、茶は一番茶摘採前後であった。

向こう1か月の気象予報

天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温・降水量・日照時間はいずれも平年並の確率 40% と予想されている。(1 か月予報 鹿児島地方気象台 5 月 20 日発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

- (1) イネの生育は、平年より葉齢はやや遅く、分けつ数はやや少なく、草丈は低い。
- (2) 5月中旬の巡回調査では発生未確認であった。
- (3) 天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温・降水量・日照時間はいずれも平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 曇雨天が続く場合は、あらかじめ粒剤を水中施用するか、または葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに液剤等で防除する。
- (2) 今年は水不足のため、老化苗での移植により本病に対する抵抗性が低下したり、本田での粒剤の施用ができなかったほ場があり、また窒素肥料が遅効きする傾向があるので、注意が必要である。
- (3) 薬剤耐性菌が発生しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

2 斑点米カメムシ類

[防除上の注意]

- (1) 早期米の等級格付け低下の主因は、カメムシ被害によるものなので必ず防除を実施する。
- (2) 米の上位等級確保のためには、液剤散布の場合では穂揃期とその7～10日後の2回防除が必要である。
- (3) 畦畔雑草は、カメムシの絶好の生息域になるので出穂期までは定期的に草刈り等管理に努める。逆に、出穂期以降は、本田への飛び込みを助長するため草刈りは実施せず、本田防除時に畦畔へも同時に薬剤散布する。
- (4) 出穂の早い、または遅い水田には集中的に飛来するおそれがあるので注意する。

普通期水稲

1 葉いもち

[防除上の注意]

- (1) 育苗期の発生に注意し、本田への持ち込みを防止する。
- (2) 育苗箱施薬は、予防的効果が高く、本田での第一次伝染と生育初期の蔓延を防止するので必ず実施する。特に長期残効型箱施薬剤は、持続効果が長く省力的である。
- (3) 向こう1か月の天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温・降水量・日照時間はいずれも平年並の確率40%と予想されている。
- (4) 補植用の取り置き苗は、葉いもちが発生しやすく本田への伝染源になりやすいので、補植が終わったら処分する。
- (5) 育苗箱施薬を実施していない場合、曇雨天が続くときはあらかじめ粒剤を施用するか、葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに液剤等で防除する。
- (6) 薬剤耐性菌が発生しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

2 スクミリンゴガイ

[防除上の注意]

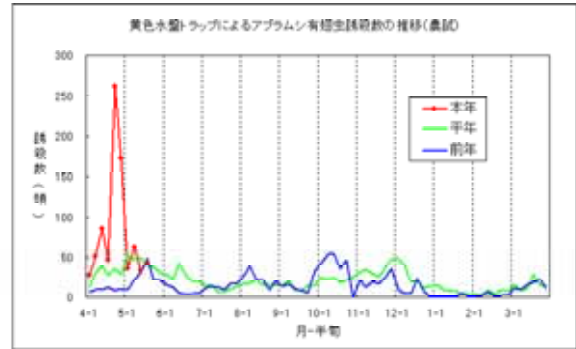
- (1) 水稲の被害は、田植え直後から3週間が著しく、その時期に深水状態ほど食害が激しいので、活着後は浅水で管理する。
- (2) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を行う。
- (3) 粒剤の水面施薬に際しては、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも7日間はかけ流しや落水はしない。

野菜・工芸作物全般

1 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

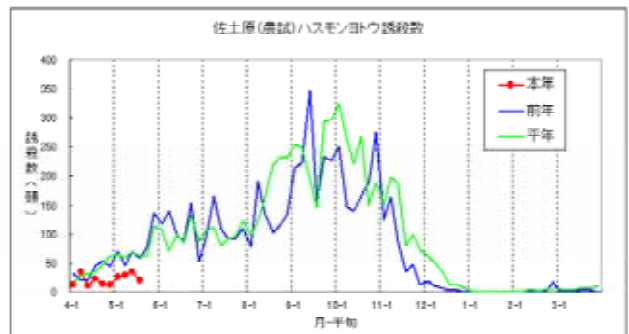
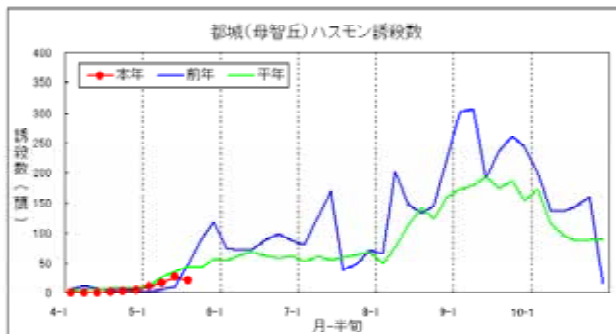
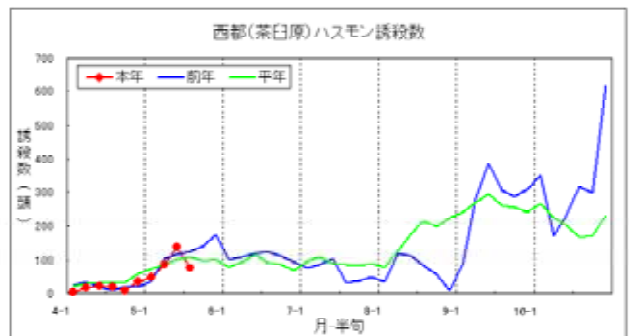
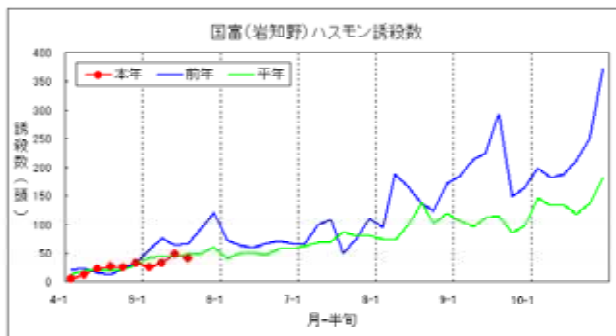
- (1) 黄色水盤トラップ (佐土原) による誘殺数は、平年より多い傾向で推移している。(右図参照)
- (2) ジャガイモの5月中旬における発生面積率87.5% (平年18.8%)、寄生度10.3 (平年0.5) はいずれも平年より多である。



2 ハスモンヨトウ (並)

[予報の根拠]

- (1) フェロモントラップ (西都、都城、国富、佐土原) による誘殺状況は、ほぼ平年並の状況で推移している。(下図参照)



施設野菜

平成23年度病害虫防除情報第1号 (平成23年5月27日発表) 参照

1 土壌病害虫

[防除上の注意]

- (1) 土壌病害のみられたハウスでは、土壌消毒の効果を高めるため、栽培終了後、地下部も含めできるだけ被害残さを施設外に持ち出し適切に処理する。
また、ハウス内は耕起を行って、残さの分解を早めることが重要である。

2 コナジラミ類・アザミウマ類・アブラムシ類

[防除上の注意]

- (1) 近年、コナジラミ類、アザミウマ類やアブラムシ類など微小害虫によって媒介されるウイルス病 (TYLCV、CCYV、TSWV、MYSV、CMV等) が問題となる事例が増加傾向にある。
- (2) これらの媒介虫は、栽培終了後野外へ拡散し、地域での密度増加、さらに次期作への主な発生源となるおそれがあるので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉するなど媒介虫の死滅を図る。
- (3) ほ場周辺の雑草は、各害虫の生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を

徹底する。

いちご(親株)

平成23年度病害虫防除情報第2号(平成23年5月27日発表)参照

1 うどんこ病(前年と同程度)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の巡回調査における発生面積率60%(H22:83.3%、H21:12.5%)は過去6年間で3番目に高く、発病葉率15.3%(H22:10.9%、H21:0.9%)は過去6年間で2番目に高い。

[防除上の注意]

- (1) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め初期防除を徹底する。
- (2) 多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- (3) 発病葉などは伝染源になるので、早めに取り除き圃場内に放置しない。

2 ハダニ(前年より多い)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の発生面積率80.0%(H22:50.0%、H21:37.5%)、寄生株率24.0%(H22:6.5%、H21:3.8%)はいずれも過去6年間で2番目に高い。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 アブラムシ(前年より多い)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の発生面積率70.0%(H22:66.7%、H21:50.0%)は過去6年間で最も高く、寄生株率22.2%(H22:5.0%、H21:12.5%)過去6年間で2番目に高い。

[防除上の注意]

- (1) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、密度が低い時点からの防除を徹底する。

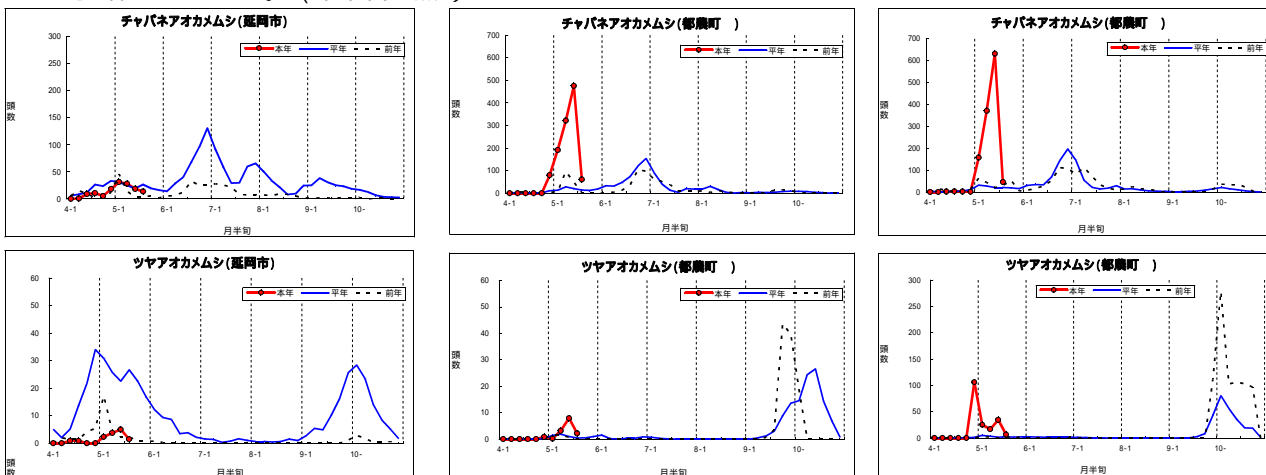
果樹全般

平成23年度病害虫防除情報第3号(平成23年5月27日発表)参照

1 果樹カメムシ類(やや多)

[予報の根拠]

(1) 県内の3地点に設置したフェロモントラップ調査では、5月初旬頃からの誘殺数が増加している。特に、都農におけるチャバネアオカメムシの誘殺数が5月第3半旬に急増している。(下図参照)



[防除上の注意]

- (1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動する。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- (2) 成熟・着色の早い果実を集中加害する傾向があるので、今後モモ、ナシ等は特に注意が必要である。

カンキツ(露地栽培)

1 そうか病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の巡回調査では、18ほ場の内1ほ場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)が確認されている。(平年：発生面積率5.3%、発病葉率0.4%)
- (2) 向こう1か月の天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温・降水量・日照時間はいずれも平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼果期である。

2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の巡回調査では、発生未確認である。(平年値：発生面積率2.1%、発病葉率0.2%)
- (2) 向こう1か月の天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温・降水量・日照時間はいずれも平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 梅雨期に予防散布する。
- (2) ミカンハモグリガの防除に努める。

3 黒点病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の巡回調査では、発生未確認である。
- (2) 向こう1か月の天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温・降水量・日照時間はいずれも平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼果期、梅雨期であるが、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回防除してからの積算降水量300mmを農薬散布間隔の目安として予防散布する。

4 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の発生面積率44.4% (平年16.9%) は平年より多、寄生葉率2.6% (平年1.3%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30% (1葉当たり虫数0.5~1頭) を目安に防除を行う。
- (2) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ - テ - ション散布を実施する。

5 ミカンハモグリガ

[防除上の注意]

- (1) かいよう病の発生を助長するので、新梢伸長期間中は定期的に防除する。
- (2) 成虫の活動は夜間で、日中は葉裏に潜んでいるので、樹全体の防除が効果的である。

(注)微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

6 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の発生面積率16.7% (平年33.5%)、寄生新梢率0.8% (平年4.6%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 成木園では異常発生の場合を除いて防除の必要性はほとんどない。
(2) 中晩柑類ではウイルス病 (C T V 等) を媒介するので留意する。

茶

1 炭疽病 (やや少)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の巡回調査では発生を認めていない。

(平年値 : 発生面積率18.9%、 m^2 当たり発病葉0.6葉)

(2) 向こう1か月の天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温・降水量・日照時間はいずれも平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

(1) 2番茶の萌芽期に防除する。

2 カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の発生面積率83.3% (平年46.6%) は平年より多、寄生葉率12.2% (平年4.9%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

(1) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ - テ - ション散布を実施する。

3 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

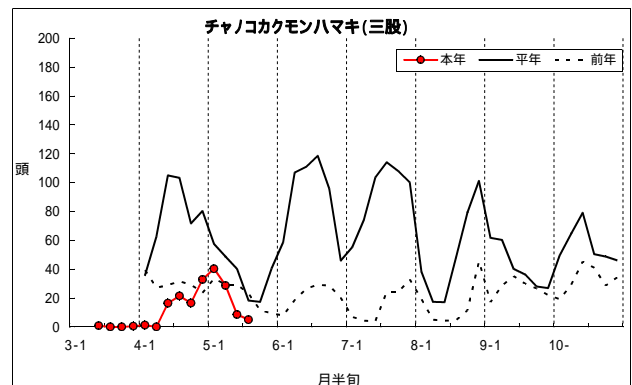
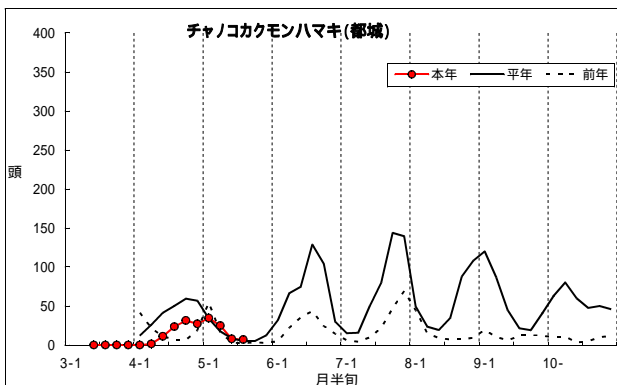
(1) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。

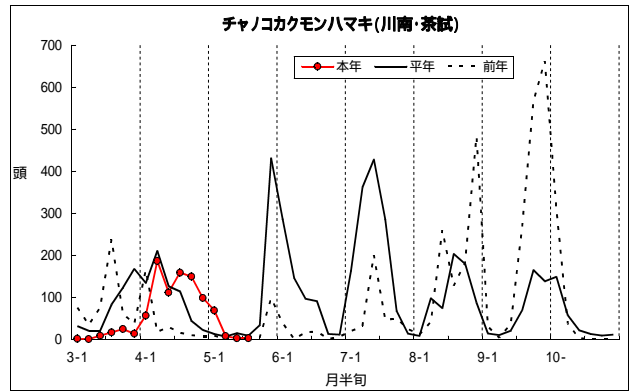
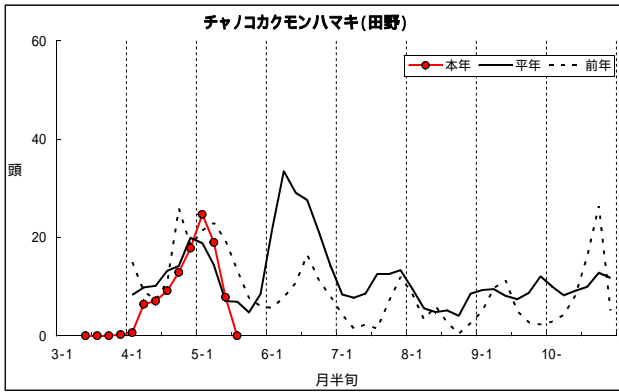
(平年値 : 発生面積率2.0%、 m^2 当たり巻葉数0.1葉)

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査による前回の発蛾最盛期は5月上旬であり、次回の発蛾最盛期は6月下旬と考えられる。

(2) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、6月の発蛾最盛期の10日後である。





4 チャハマキ (やや多)

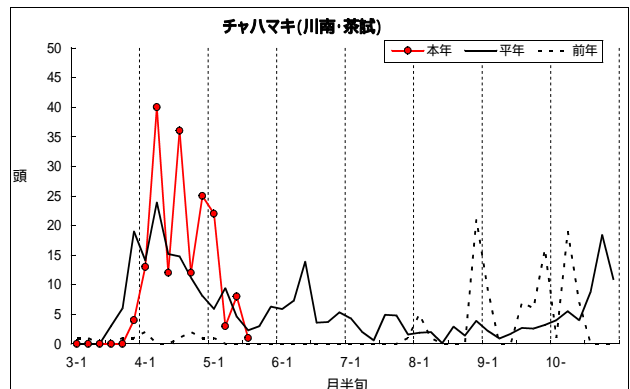
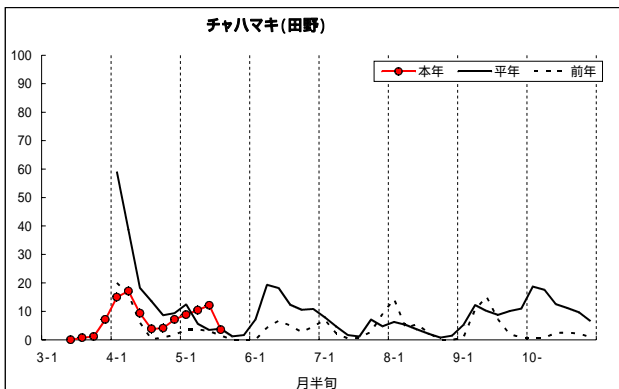
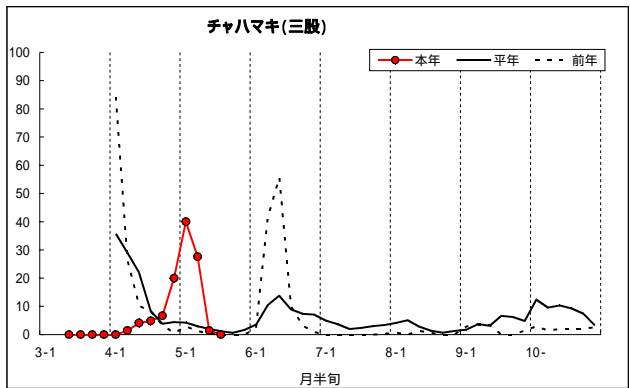
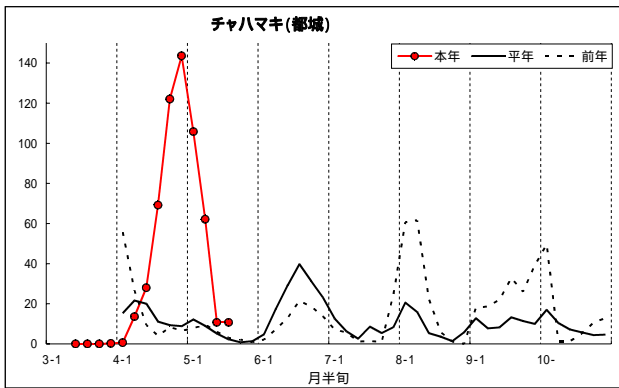
[予報の根拠]

(1) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。

(平年値：発生面積率2.8%、 m^2 当たり巻葉数0.1葉)

[防除上の注意]

- (1) フェロモントラップ調査による誘殺状況は、川南(茶業支場)4月、北諸県地区で4月の終わりから5月にかけての誘殺数が多くあり、今後注意する必要がある。次回の発蛾最盛期は、川南では6月中旬、北諸県地区では7月上旬と考えられる。
- (2) チャノコカクモンハマキの発蛾最盛期と10日以上差がない場合は、チャノコカクモンハマキと同時防除が可能である。



5 チャノホソガ (並)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の発生面積率25.0% (平年16.3%) は平年並、 m^2 当り巻葉数0.8葉 (平年0.4葉%) は平年よりやや多である。

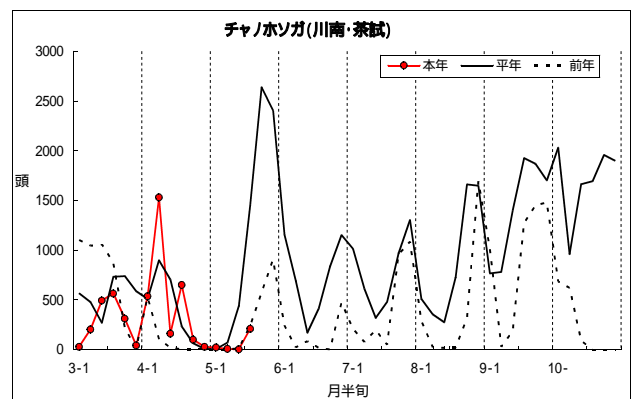
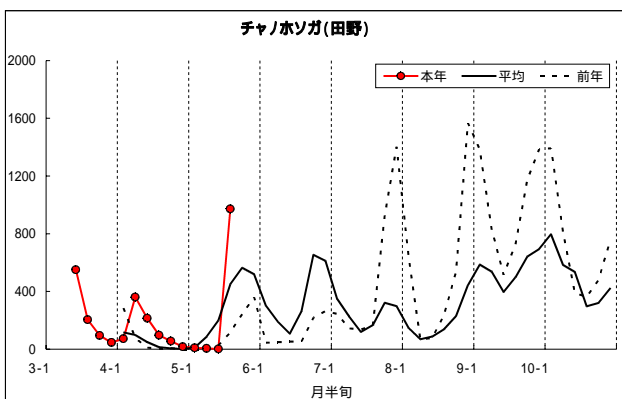
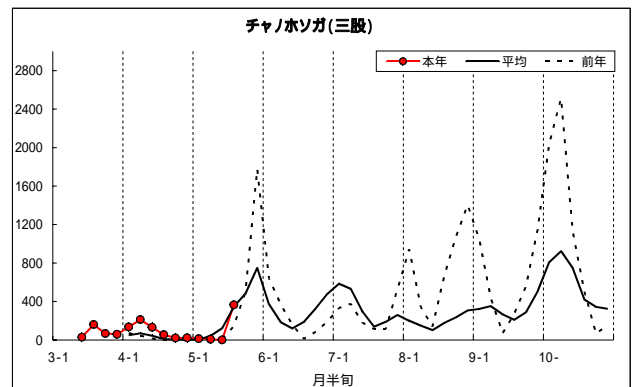
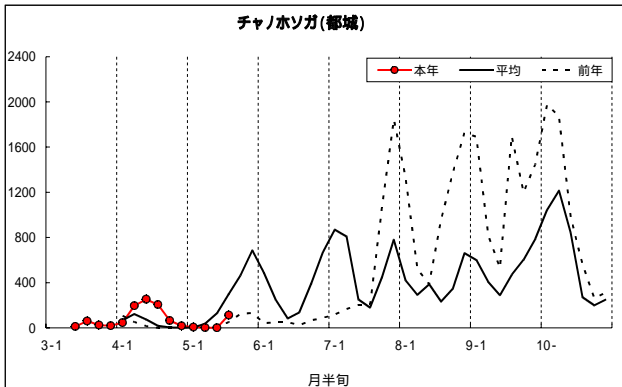
[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査での誘殺状況では、発蛾最盛期は平年よりやや遅い傾向

で推移しており、次回の発蛾最盛期は6月上旬と考えられる。防除適期は発蛾最盛期の約10日後である。

(2) 脱皮阻害剤は、卵期～皮下潜葉期に散布する。

(3) 一番茶芽や一番茶残葉に本虫による巻葉がみられた茶園では、二番茶芽で多発する恐れがあるので注意する。



7 チャノミドリヒメヨコバイ (並)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の見取り調査による発生面積率16.7% (平年9.5%) は平年よりやや多、寄生葉率0.3% (平年0.3%) は平年並である。

[防除上の注意]

(1) 萌芽直後から1、2葉期を重点に防除する。

8 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の見取り調査による発生面積率41.7% (平年46.8%)、寄生葉率3.4% (平年3.8%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 例年、2番茶期から発生が増えてくるので注意する。

9 クワシロカイガラムシ (やや少)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の巡回調査では発生を認めていない。
(平年値：発生面積率27.7%、寄生株率8.4%)

[防除上の注意]

(1) 防除適期は、幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期であるので、ふ化状況をよく観察し防除する。

(2) 薬剤散布量は、成園で10a当たり1,000リットルを目安に、枝幹に十分かかるようにいねいに行う。

農薬危被害防止運動

6月1日から8月31日は、農薬危被害防止運動月間です。農薬の適正使用により、事故防止に努めましょう。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://www.jpnpn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ
<http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
- 3 発生量（程度）の区分
多 い （高 い） やや多いの外側 10%の度数の入る幅
やや多い （やや高い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として 40%の度数の入る幅
やや少ない （やや低い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
少ない （低 い） やや少ないの外側 10%の度数の入る幅
（平年値は過去 10年間の平均）
- 4 予察情報の種類
病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。
（1）予報……向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
（2）注意報……主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
（3）警報……主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
（4）特殊報……県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
（5）防除情報……注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。ホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127

E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp